

中央ユーラシアのネットワークとウイグル商人

弘前大学人文学部講師 松井 太

中央アジアから中国にまたがって活発な商業活動を展開したオアシス商業民としては、ソグド商人が有名である。6世紀のソグド人の商圏は本拠ソグド地方（アム川中・上流域）を中心に東は中国から西はビザンツ帝国にまで拡大しており、さらに唐代中国の経済・文化にソグド人が大きな影響を与えたことは周知の通りである。

一方、13世紀に内陸アジア草原からおこったモンゴル帝国は、ゆるやかにユーラシア東西を結びつけ、経済・文化の大交流をまき起こした。とくにイラン系ムスリム商人は、財務官僚や特権商人としてモンゴル政権と結びつき、内陸アジア経由・南海経由の交易ルートを結合させてユーラシア東西にわたる商業活動を繰り広げた。

さて、唐王朝が滅亡した10世紀初頭からモンゴル帝国が登場する13世紀初頭までの約300年間、ユーラシア世界は分裂と多極化の中にあった。しかしこの間も、政権・国家の枠組みを超えた広域商業活動は継続していた。とくに中央ユーラシア東半での広域通商を担ったのがいわゆる「ウイグル商人」である。本稿では、彼ら「ウイグル商人」の登場の経緯や商業活動の諸相をとりあげ、さらにその歴史的役割について論じたい。

■ウイグル遊牧帝国とソグド商人

いうまでもなく「ウイグル」の名は、元来モンゴル高原で遊牧生活を送っていたトルコ系ウイグル族に由来する。彼らは8世紀中葉、同じトルコ系の突厥帝国を滅ぼし、新たにウイグル遊牧帝国を創立する。折しも安史の乱に苦しむ唐朝はこのウイグル帝国に救援を要請した。ウイグルの援軍は、それまで足かけ8年にわたっていた大反乱をあっさりと鎮定し、この功績によって唐の軍事的な庇護者としての地位を固めた。またウイグルは、唐から甘粛・タリム盆地を奪いさらに中央アジア進出をめざす吐蕃王国軍をも天山山脈東端の北庭で撃破し（792年）、天山南北の東西交通路を確保した。8世紀末から9世紀前半のアジア東方は、北のウイグル・東の唐・西の吐蕃の3大勢力が共存・対峙する状況を迎えた。チベットのラサに現存する「唐蕃会盟碑」で有名な唐・吐蕃の和平条約（821～823年）も、実は北のウイグルをも交えた「三国会盟」の一環であった。

ところで、内陸アジア草原の遊牧国家とソグド人をはじめとするオアシス商業民とは、古来から相互協力・相互依存の関係にあった。遊牧国家の軍事力は商業民の遠距離交易の安全を保障するものであった。一方、遊牧国家が中原諸王朝から平和的または暴力的に獲得した絹織物などの物産は、商業民によって西方へ転売され、遊牧民・商業民の双方に巨

万の富をもたらした。またソグド人の書記能力は、遊牧国家の運営・統治にとっても重要な要素となり、歴代の突厥カガン（君主）の側近には多数のソグド人が加わっていた。

突厥に代わったウイグル帝国でもその状況は変わらず、ソグド人がウイ



モンゴル高原のカラバルガスン遺跡。
ウイグル帝国の首都オールドバリクの廃墟である。

グル帝国にもたらした経済的・文化的影響はきわめて大きかった。ウイグル帝国の第2代カガンはバイバリク（「富貴の都城」の意）、第3代カガンはオールドバリク（「本営の都城」の意）という名の城郭都市をそれぞれモンゴル高原に建設し、商業・手工業・農業に従事するソグド人・漢人の便宜を図った。突厥がこのような城郭都市を建築しなかったことと比較すると、ウイグル帝国とソグド人・漢人商業民との結びつきは、突厥時代よりもさらに深化したといえる。

さらに、ウイグル帝国が安史の乱鎮圧の功によって対唐外交の主導権を握った結果、ソグド商人はさらなる商業拡大の機会を得ることになった。有名な絹馬交易、すなわちウイグルの馬と唐の絹織物との交易の盛行である。これまで通説となってきた「ウイグルによる絹馬交易の強制が唐の財政逼迫を招いた」という考えは最近の研究によって見直されつつあるが、いずれにせよ、絹馬交易が以前に増してはるかに大量の絹織物をウイグル国内にもたらしたことは確実である。ウイグル帝国と結びついていたソグド人を中心とする商人集団は、ウイグルに流入した資本を元手に両替・預金・高利貸・手形・小切手・不動産賃貸などさまざまな事業を唐領内で経営した。このようなウイグル金融資本は漢籍史料中でも「回鶻^{ウイグル}銭」と呼ばれ、中国金融界に大きな影響力を有したことが伝えられる。唐代ソグド商人の華々しい商業活動も、ウイグル帝国という強力な後ろ盾を得てこそ可能だったのである。

■ウイグル商人の登場

強盛を誇ったウイグル帝国も、天災の連続と内乱による混乱の中、840年にはキルギス族の攻撃を受けて瓦解した。ウイグル遊牧民の大集団はモンゴル高原を離れて中央アジア地域へ移住し、9世紀末頃までに西ウイグル国と甘州ウイグル国という2つの亡命王国を成立させた。西ウイグル国は北庭と高昌とを夏・冬の都として天山山脈東半城をおさえ、

甘州ウイグル国はその名の通り甘肅回廊の中央に位置する甘州に拠った。

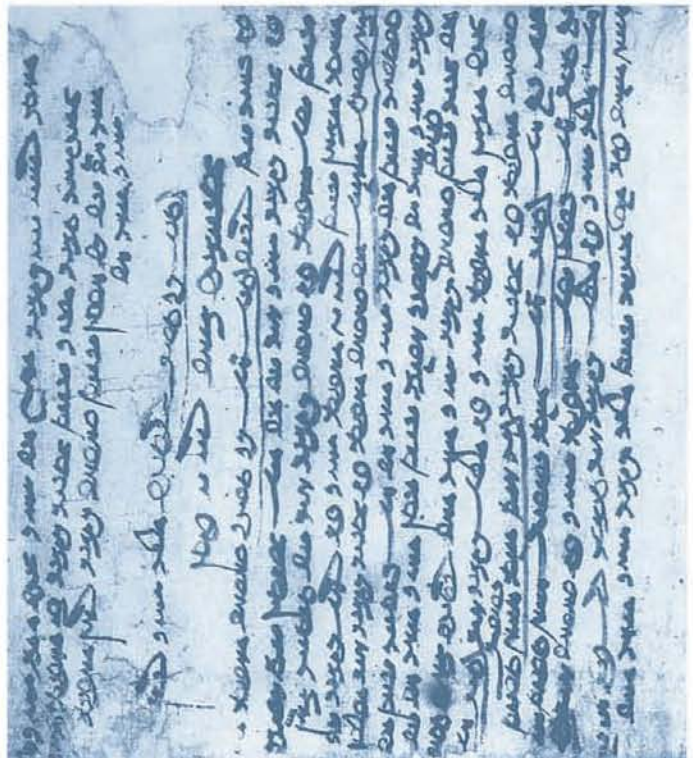
いわゆるシルクロードの主要幹線の一つは、甘肅地方からタリム盆地の南縁・北縁を通る「オアシスの道」であった。このルート上に点在したオアシス都市にとって、中国王朝と西方との間を中継する東西交易はきわめて重要な経済的意義を持っていた。東西交易活動に従事するオアシス都市国家や商人は、好むと好まざるとに関わらず、東西を結ぶ主要幹線上に新たに現れた西ウイグル・甘州ウイグルとの関係を深めざるを得なかった。

また西ウイグル・甘州ウイグルの側も、ソグド人・漢人などが多数を占めるオアシス都市を直接の支配下に取めた結果、単なる遊牧国家ではなくオアシス都市国家としての側面を兼ね備えた。両国は、コータン王国や敦煌の節度使政權など周辺のアアシス都市国家ともおおむね友好的な関係を保ち、唐・五代・宋の中国諸王朝やキタイ帝国との交易・通商活動を展開した。ここに「ウイグル商人」と呼ばれ得る商人集団が登場することになる。キタイ帝国の首都である上京には「回鶻營」と呼ばれるウイグル商人の商業拠点が設けられた。またキタイ帝国の南玄関にあたる燕京（現在の北京地区）や、さらには北宋の首都開封や陝西の秦州でも、ウイグルからの使節に随行したウイグル商人が多数残留して交易・商業活動に従事していた。そもそも、ウイグル国から諸外国へ派遣される使節自身も商人が任命されることが多かった。

ただし「ウイグル商人」とは「ウイグル国の支配下にある商人」を意味するに過ぎず、決して人種的・民族的な概念を示すものではない。元来は遊牧民であったウイグル人が中

央アジアへの移住後いきなり交易活動に「転業」したわけではなく、初期「ウイグル商人」の多くは実際にはウイグル支配下のソグド人・漢人の商人であった。この点は、唐代の「回鶻銭」を実質的に経営したのがウイグル遊牧民ではなくソグド人・漢人商人であったと同様である。

しかし時代が下って10世紀後半頃になると、ウイグル語を日常的に用い、名実ともに「ウイグル商人」と呼ぶにふさわしい商人たちが現れる。その状況は、



敦煌出土のソグド語・ウイグル語バイリンガル文書（部分）。行は左から右へ進む。16行目後半～18行目冒頭と19行目後半～20行目冒頭がウイグル語で書かれ、その他のソグド語本文にもウイグル語人名が交じる。ソグド文字がウイグルに受容され、ウイグル文字となる過程を示す資料としても重要である。

敦煌や高昌・トウルファンから発掘されたソグド語・ウイグル語の古文書類からうかがうことができる。これらの古文書類の中には、10世紀後半～11世紀初頭頃のソグド語・ウイグル語のバイリンガル商業文書がある。この文書は、ウイグル語を学んだソグド人か、もしくはソグド語を学んだウイグル人が記したものと考えられる。いずれの場合にせよ、このバイリンガル文書は、それまでソグド人などのオアシス商人が主導してきた商業活動にウイグル人が直接に参入してきたことを示している。

当時の中央アジアでは、ウイグル帝国の崩壊とウイグル遊牧民の集団移動が引き金となり、その全域で「トルキスタン（トルコ人の住地）化」が進行していた。西ウイグル支配下の天山東部地方でも、モンゴル時代までにはトルコ語＝ウイグル語を用いる者が住民の大多数を占めるようになっていた。その過程では、ウイグル遊牧民の定住化・商業化・農耕化と、ソグド人や漢人のトルコ語（＝ウイグル語）化という双方向からの文化変容・文化混濁が生じていたと考えられる。中央ユーラシア商業界の主役がソグド商人からウイグル語を日常語とする「ウイグル商人」へと交替するのも、「トルキスタン化」の一環ととらえねばならない。

■ウイグル商人の活動

唐・五代・北宋の歴代中国王朝は、ウイグル帝国やキタイ帝国などの大型遊牧国家に対してはその風下に立たざるを得なかったが、中央アジアのオアシス都市国家に対しては対等の外交関係を認めなかった。諸オアシス国家は中国皇帝に臣従の意を表明して土産品を献上（朝貢）し、中国皇帝はこれに対して莫大な量の絹織物や奢侈品を恩恵的に賜与（回賜）した。ここに中国とオアシス政権の間での「朝貢貿易」という経済交渉が成立する。

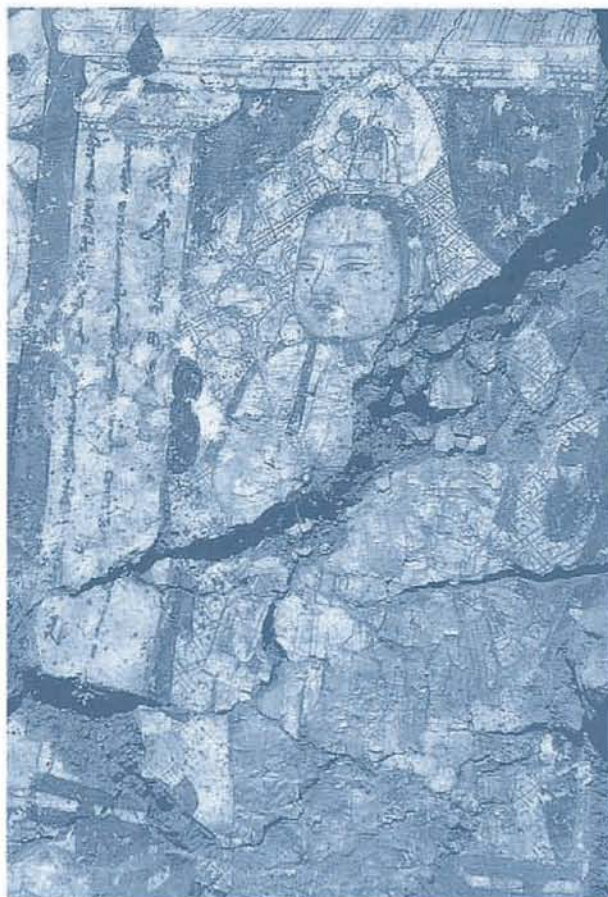
とはいえ、中国皇帝の権威を認めたくえでの朝貢・回賜とは全くの建前に過ぎず、ウイグル・敦煌・コータンなどの諸国にとっては貿易の実利こそが何よりも優先した。彼らは回賜を求めて頻繁に朝貢し、中国側が財政事情から朝貢の頻度を制限すると、隣国の朝貢に使者を随行させて回賜の分け前を得たり、あるいは中国側の情報不足に乗じて一国で数種類の国名を使い分けたりと、様々な手段で利益を追求した。西ウイグルも「高昌ウイグル・西州ウイグル・北庭ウイグル・龟兹ウイグル」など数種類の国名を使い分けている。中国王朝からの回賜そのものも、周辺国家の臣従を手厚く賞するという建前とは裏腹に、回賜の額は朝貢品の種類・量に応じ一定の基準に則って機械的に定められており、純然たる商取引と実質的に変わるところはなかった。

政府間交易以外にも、前述したような中国内地に設けられた商業拠点を中心に民間ベースで活動するウイグル商人もいた。彼らの多くは本国からの使節に随行してそのまま長期滞在した者であり、一方ウイグル本国から任命・派遣される使節も往々にして同業の商人であった。中国在住ウイグル商人は、本国使節が持参した物産・奢侈品や中国側からの回賜の分け前を受け取って中国内で売買運用し、さらには蓄積した資本を元手に金融業・不動産業を経営した。このような商業経営は、ウイグル帝国時代のソグド商人の手法をそのまま継承したものである。その他、国境地帯では指定貿易場での取引（互市）が行われ、

また密貿易も盛んであったらしい。

一方、中央ユーラシアにおけるウイグル商人の活動の実態をより具体的に明らかにするのは、さきに言及した敦煌・トゥルファン地域出土の10～11世紀のウイグル語商業文書である。これらの商業文書には、商人のみならずウイグル王族や貴族・官僚・軍人、さらには仏教・キリスト教・マニ教の僧侶までもが登場し、国を挙げての商業活動が行われたことを示している。彼らの間では、出資者から預かった絹織物や貴金属などを遠隔地で売買・運用して利潤を分け合うという出資契約が一般的に行われ、このような出資運用・共同事業者をウイグル語で「オルトク」（原義は「仲間、パートナー」）と呼ん

だ。遠隔地間交易は隊商組織によって行われ、自らが隊商を組織できない場合でも、他の隊商に仲介を委託することで遠隔地の「オルトク」との交易・連絡が可能だった。文書中には甘州・肅州・ハミ・トゥルファン・高昌・北庭・亀茲・コータン・カシュガル・タラス・キタイ・タタル（モンゴル高原の遊牧集団の一つ）・オテュケン山（モンゴル高原中央部の一地域。オールドバリクもこの地域に位置した）といった地域・集団名がみえ、中央ユーラシア東半を覆うように当時のウイグル商人の経済・情報ネットワークが張りめぐらされていたことを示している。交易品としては高級織物（絹・錦・緞子ほか）・宝石・貴金属・工芸品・薬品・香料・染料・食品・家畜などが現れるが、その多くはウイグルと中国との朝貢貿易における交易品の種類と重なっており、広域にわたる物資流通が跡づけられる。高昌・トゥルファン周辺に残る西ウイグル期の仏教・マニ教美術も、このような活発な商業活動によって経済的に支えられていたのである。



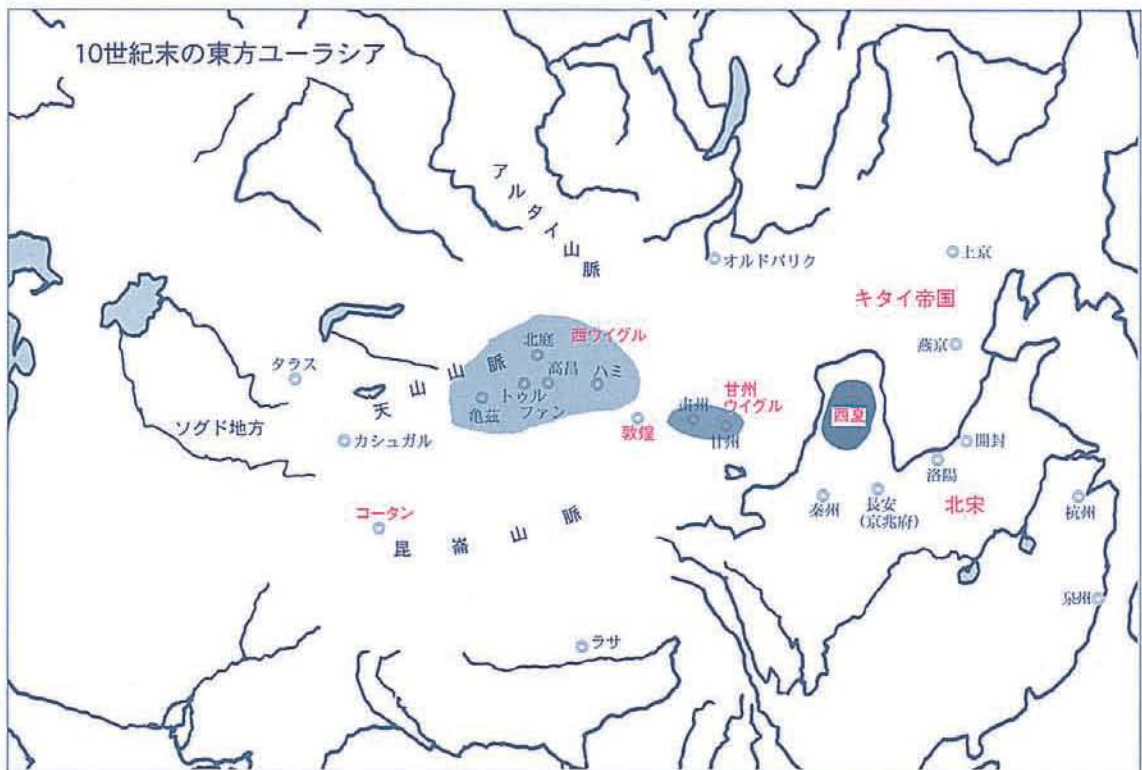
北庭の仏教寺院遺跡内の壁画に寄進者として現れる西ウイグル王。着衣・王冠の部分には豪華な金箔が施されており、西ウイグル国の経済的繁栄をうかがわせる。

■ウイグル商人とモンゴル帝国・ムスリム商人

甘州ウイグル国は11世紀中葉に西夏国によって滅ぼされ、12世紀には西ウイグル国も金

朝に逐われて西走してきた第2次キタイ帝国（西遼）の間接支配下に置かれることとなった。しかしウイグル商人の広域活動は前代に引き続き行われた。西ウイグルからの使節はモンゴル高原や西夏領を横断して金朝にしばしば来貢し、金朝もウイグル人担当の通訳書記官を政府内に常設していた。

西ウイグル国にとっての最大の転機は13世紀初頭に訪れた。チンギス・ハンによるモンゴル高原の統一とモンゴル帝国の成立である。約3世紀半ぶりに政治的・軍事的に統合された草原地帯の遊牧民が、周辺諸国にとって大きな脅威となることは自明であった。情報・経済ネットワークを活用して情勢を判断した西ウイグル国は、衰退しつつあった西遼から離脱してモンゴル帝国に率先臣従した。オアシス都市支配を通じてウイグルが確立していた文字文化や行政・経済システムは、草創まもないモンゴルにとっても帝国支配のうえで重要な意義をもった。その結果、モンゴル帝国の行政官僚やチンギス王族子弟の家庭教師・指南係として、多数のウイグル人が任命された。かつての突厥・ウイグル遊牧帝国においてソグド人が果たした政治的・文化的役割を、今度はウイグルがモンゴル帝国に対して果たしたのである。モンゴルに対するウイグルの文化的影響力を示す顕著な例としては、現在の縦書きモンゴル文字が直接にはウイグル文字を継承していることが挙げられるが、そもそもウイグル文字自体もソグド文字を継承したものであった。



モンゴル帝国の経済政策も、前述の「オルトク」契約関係に基づくウイグル商人の商業形態がモデルとなった。税や徴発という形態でモンゴル帝室・政府のもとに集められた資本を、モンゴルの「オルトク」すなわち「仲間・共同事業者」であるウイグル商人が各地で運用し、利益を分け合うという経済システムが成立した。これも突厥・ウイグル帝国と

ソグド商人との関係をそのまま引き継いだものといえる。さらに、モンゴル政権と結託したムスリム御用商人も、やはり「オルトク」（漢籍史料では「斡脱」と音写される）というウイグル語で称された。このことは、モンゴル帝国の経済システムがおもにウイグル商人によって整備され、その基盤の上にムスリム商人が参入してきたことを示している。

その後、モンゴル政財界におけるウイグル商人の影響力は、ムスリム官僚・商人の大々的進出にともなって相対的に低下した。しかし、モンゴル帝国の支配領域の拡大は、ウイグル商人にとっても活動圏の拡大をもたらした。元朝治下では多くのウイグル人財務官僚が登用されて経済上の要地に配置され、ムスリム財務官僚と同様に官民一体の経済活動を展開した。彼らの中には、泉州の南海貿易を管轄し、その間に蓄えた私財を中央アジアのウイグル仏教教団に喜捨した例もある。さらに敦煌・トゥルファン地域出土のウイグル語古文書類からも、モンゴル時代のウイグル商人たちが、あるいは旧西ウイグル領から甘粛・華北へ出張して商業を営み、あるいは杭州特産の高級絹織物を敦煌にまで取り寄せるなど、広域商業活動に従事しているさまがうかがえる。ウイグル商人の大部分は仏教徒であったが、彼らとムスリム商人との関係も必ずしも敵対的なものではなく、商業活動において両者はしばしば提携・協調した。14世紀前半には旧西ウイグル領の実効支配権は元朝からチャガタイ＝ハン国へと移るが、その後も大都で印刷されたウイグル語仏典や元朝公認の曆書などが旧西ウイグル領に大量に流入しており、逆に旧西ウイグル領からは当時の世界最高級品として珍重されたブドウ酒などが恒常的に元朝皇帝のもとへ送納されるなど、政権の枠組みを超えて活発に物資が流通した。

ウイグル商人の広域経済ネットワークは、ムスリム商人のそれには規模のうえでは及ばなかったとはいえ、モンゴル帝国時代の終焉まで絶えることなく機能したのである。

■ウイグル商人の歴史的役割

以上に見てきたところから、ウイグル商人の大きな歴史的役割として、①唐代ソグド人の商業システムを継承して中央・東方ユーラシア広域経済ネットワークを担った、②モンゴル帝国に経済システムを提供し、後のムスリム商人主導のユーラシア大経済交流の基盤を準備した、という二点を指摘できよう。

なお、本稿でもいくつか言及したウイグル語古文書類については、近年急速に研究が進んでいる。10世紀からモンゴル時代にわたるウイグル商人の活動をさらに具体的に明らかにすることは、唐代ソグド商人やモンゴル時代のムスリム商人の活動を考えるうえでも重要である。今後の研究の進展が期待される。

* * *